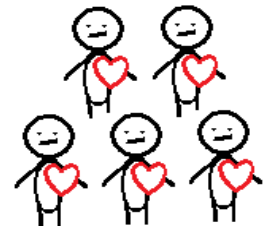


はじめに

理学療法は、**感情**を持った「人間」を対象に行う。

よって、**感情**を考慮することは重要であるが、
具体的に**感情**はどう**動き**を変化させているのか？

しかし、**感情**が**動き**にどう影響するか調べる上で、
対象者の**感情**を統一するのは難しい…

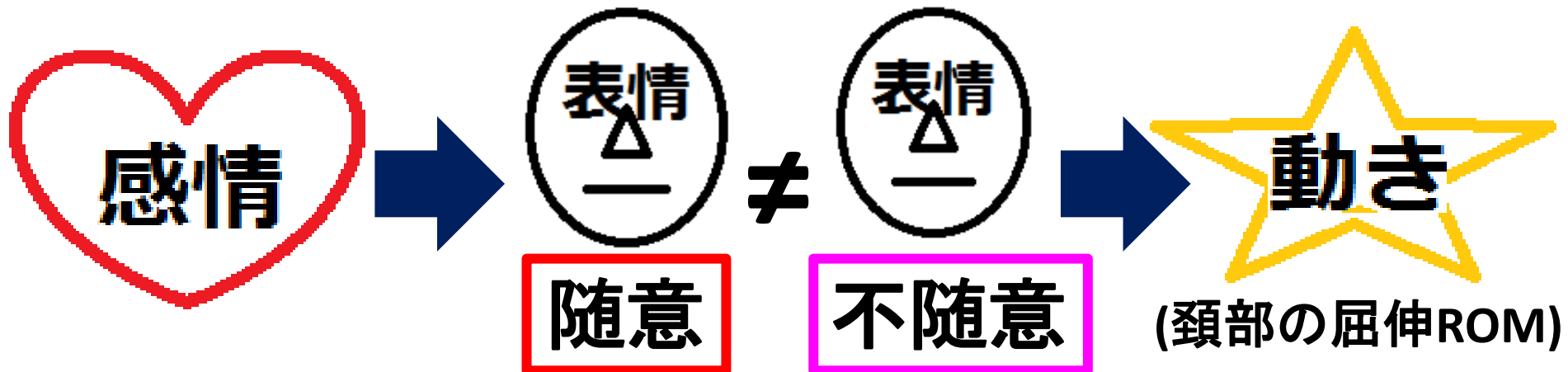


感情が真っ先にリンクされやすい**表情**が
動きに対してどう影響するのかを調べる。

研究内容

しかし、**表情**の不随意的再現統一は難しいため、
今回は**随意的な表情**で調べる。

動きは頸部の屈伸可動域をみることにした。



方法

頸部に疾患の無い健常者30名を対象に行った。

(平均31.6±11.5歳 男性13名、女性17名)

各対象者に以下図の三表情をしていただき、

普段の表情 *Usually*

笑顔 *Smile*

嫌悪 *Aversion*



※広頸筋による代償を防ぐため、口は閉じておく。

基本軸

肩峰を通る床への垂線

移動軸

外耳孔と頭頂を結んだ線

椅子座位:膝・股関節屈曲90°

各表情の頸部の屈曲・伸展ROMを日本整形外科学会制定方法でゴニオメーターにて測定する。

結果(表)

統計学的分析解析ソフトJSTATを使用。

一元配置分散分析反復測定(対応あり)とBonferroni法による多重比較を行った。

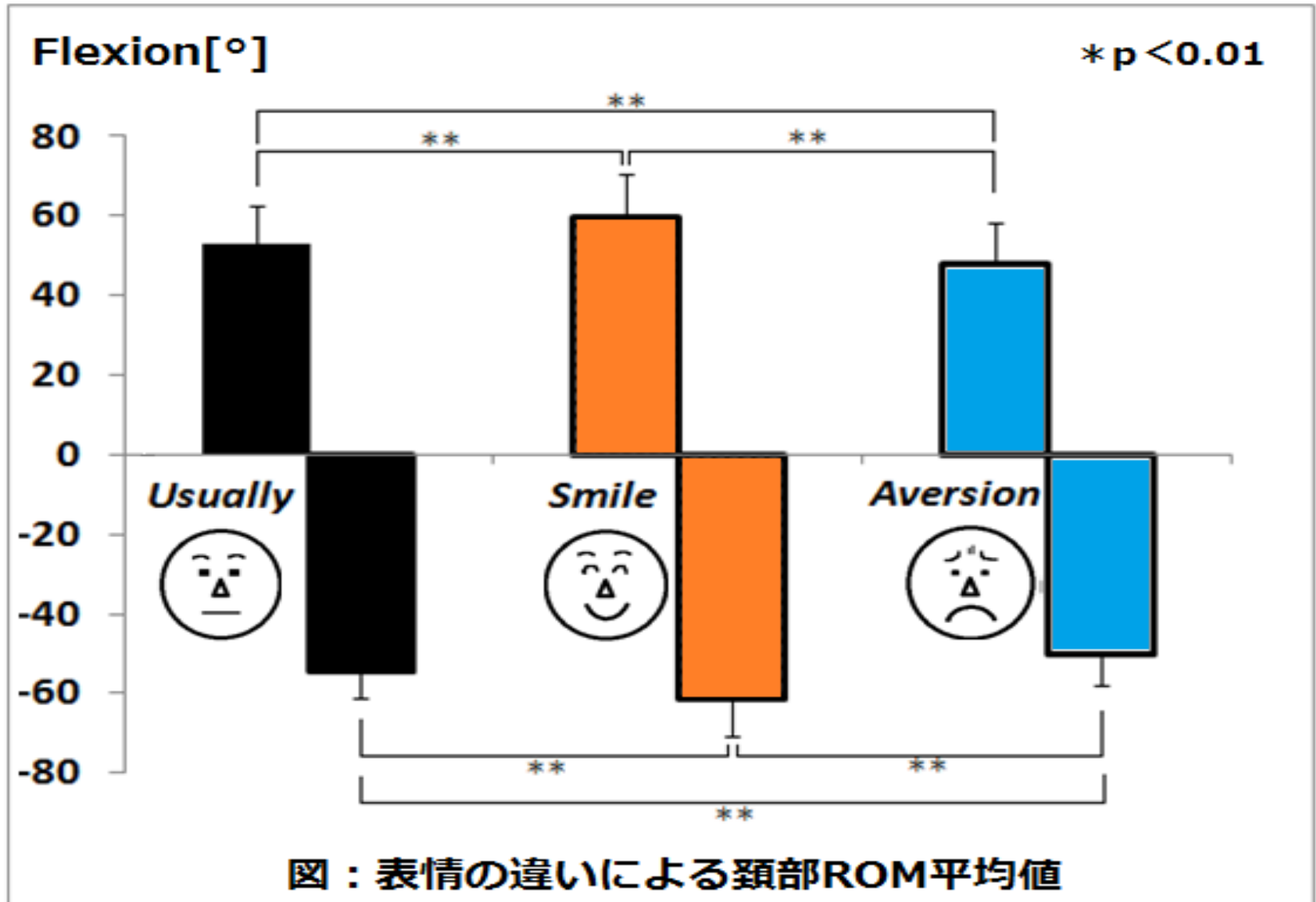
- 三表情間での屈曲角度

- 三表情間での伸展角度

※有意水準は5%未満とした

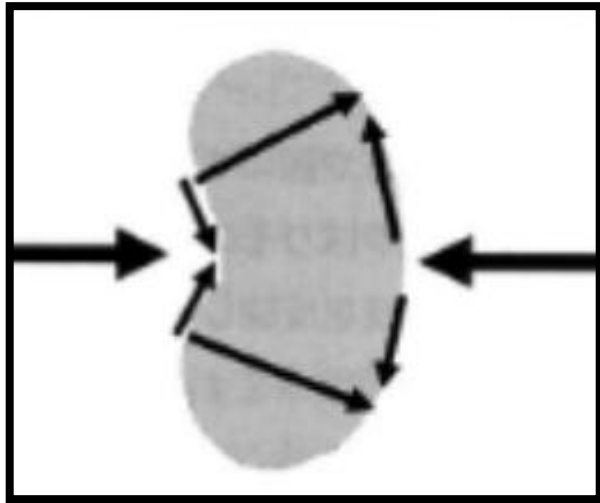
	屈曲[°]	伸展[°]
<i>Usually</i>	53.5 ± 9.6	55 ± 7.1
<i>Smile</i>	60.3 ± 10.7	62 ± 9.8
<i>Aversion</i>	48.2 ± 10.7	51 ± 7.8

結果(グラフ)



屈曲・伸展ともに有意な差が得られた。

考察① 皮膚運動だとしたら？



左図： 福井勉 著 『皮膚運動学』 引用

「皺が寄る部分とその拮抗側は
共に運動を制限する。」

笑顔



皮膚が放射状
に広がる

嫌悪



皮膚が顔の中心
へ集まる

顔上の皮膚・表情筋
筋膜の変化が、
頸部可動域を変化
させたのではない
か？

考察② 自律神経だとしたら？

女子大生30名にストレス課題(暗算15分)



脳波β波、心拍数増加

広崎らによる先行研究

以下3群に分け
再度測定

開眼安静群
(10名)



漫才視聴の
笑い群 (10名)



意識的笑顔群
(10名)



β波 心拍数
増加のまま

β波 心拍数減少
α波の増加

意図的な笑顔も副交感神経を優位にし、α波を増加させる。

よって、頸部の筋緊張も低下したのでは？

対象者を観察して

可動域変化が乏しかった対象者の特徴



日常から表情があまり変化しなさそうな方

Smile、Aversionにて、屈曲・伸展どちらも変化しなかった。



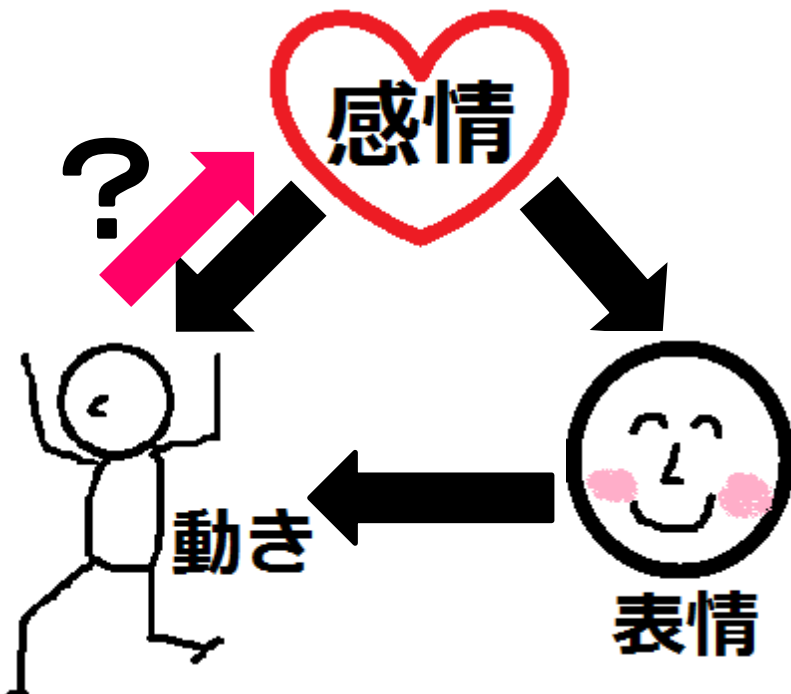
表情が硬くなっていそうな方

Smile、Aversionにて、屈曲・伸展どちらも可動域が縮小した。

今回は感情を伴わない表情だったが、感情を伴った場合ではどのように可動域は変化しただろうか？

まとめ

「作られた表情」は矢状面上の頸部可動域を変化させた。つまり、“動きを変える”ことがわかった。作られた表情ではなく、感情を伴った自然な表情の場合は、さらに動きに影響するだろうと考える。



感情が表情を変化させ、動きを変化させるということは、その逆

『動きが感情を変化させる』
も十分起こりうるのではないか。



最後に

『Move』とは、

「(身体、物体が)動く」以外に、「心が動く、感動する」

感情変化の意味もある。

私は、日々の臨床で

 『One move one love』 

(ひとつひとつのmoveを大切にする)

を目標に、患者さんに接してゆきたいと思う。

ご静聴ありがとうございました。